慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーカイブズ学における「コンテクスト」と「ネットワーキング」
Sub Title	
Author	齋藤, 歩(Saitō, Ayumu)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.5, No.1 (2018. 3) ,p.27- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第7回 デジタル知の文化的普及と深化に向けて： コンテクストネットワーキングの分散型ミュージアムへの展開 開催日時：2017年11月24日 (金) 14:00～17:30 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス西別館1 Keynote
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000005-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

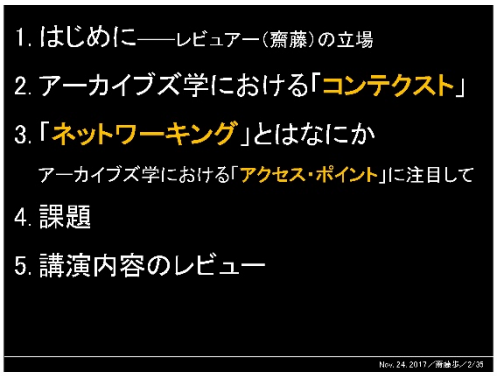
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Keynote：
アーカイブズ学における「コンテクスト」と「ネットワーキング」

齋藤 歩
（京都大学総合博物館（研究資源アーカイブ系）特定助教/アーキビスト）

本日はお招きいただきありがとうございます。依頼いただいて渡部先生と金子先生のご講演についてレビューすることになっていますが、その前に、レビュアーである私の立場を示しておきたいと思いまして、スライドを用意してきました。

タイトルは、「アーカイブズ学における『コンテクスト』と『ネットワーキング』」です。本日のシンポジウムのキーワードを「コンテクスト」と「ネットワーキング」と理解しまして、それにあわせて、私が専門とするアーカイブズ学でこの二つがどう語られているかをこれから話します。



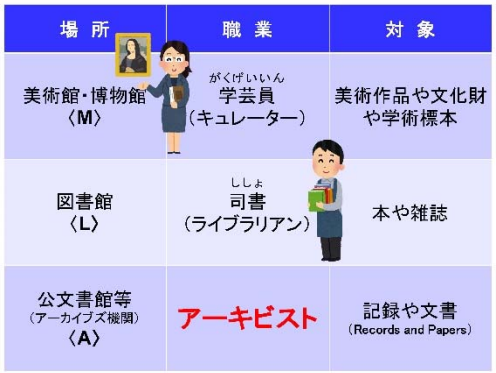
はじめに私の立場を説明するために、アーカイブズ学とアーカイブズ、それから勤務先の京都大学での活動に触れます。次に、2 で「コンテクスト」、3 で「ネットワーキング」について述べます。そのうえで、この二つに関する課題を挙げます。以上をふまえて、ご講演の内容をレビューします。

1．はじめに

はじめに、私が専門とする研究領域について説明します。

私の専門はアーカイブズ学です。国際的にアーカイブズ学は、archival science または archival studies と呼ばれます。ここでのアーカイブズとは、第一義的には公文書を指します。その意味で、アーカイブズ学は、公文書を永久的に維持・管理するための方法や考え方について検討することを中心的なテーマとする学問といえます。

アーカイブズ学で私が研究しているのは、建築分野のアーカイブズです。この分野は「建築レコード architectural records」と呼ばれる資料群を考察の対象としており、建築設計等の仕事のプロセスで作成される業務記録（records）と個人文書（papers）とが併存することにその特徴があります。公文書（government records または public records）とは異なる性質を明確にする意味で、non-government records の一種にカテゴライズされることもあります。



このような記録や文書を扱う専門職を「アーキビスト archivist」と呼びます。聞

き慣れない言葉かもしれませんが、隣接領域と比較すればイメージしやすいと思います。つまり、文化施設として比較されることが多い MLA のうち、M のミュージアムにあたる美術館・博物館の学芸員、L のライブラリーにあたる図書館の司書と並ぶかたちで、A のアーカイブズにおけるアーキビストを位置づけることができます。

アーカイブズのイメージをさらに共有するために、違う角度からもアプローチしてみます。

「curator」で画像検索してみると、検索結果から絵画等の美術作品を対象とした仕事であることがわかります。同じように「librarian」で検索すると、書籍や雑誌を扱う職能であることがわかります。最後に「archivist」で試してみると――なかなか馴染みのない光景かもしれませんが――収蔵庫のなかで保存箱に囲まれるアーキビストの姿を見ることができます。この箱のなかには記録や文書が入っているはずです。これらの検索結果は、三つの職能の違いを端的に表現しています。

私も京都大学で、研究者兼アーキビストとして働いております。学内での立場としては、京都大学総合博物館に所属する教員で、「京都大学研究資源アーカイブ」という事業の担当です。

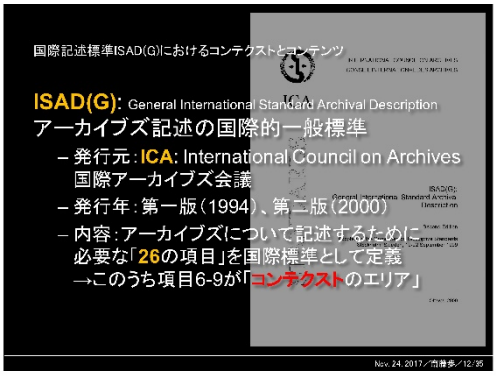
研究資源アーカイブは、京都大学の研究者や研究室による教育と研究のプロセスで作成または収集された資料を対象とした活動です。私のアーキビストとしてのミッションは、これらの「研究資源」を次の世代の研究者が利用できるように、「アーカイブズ」として整理して公開することです。

活動の概要を知っていただくために、研究資源アーカイブの主要なワークフローを紹介します。ここでは相談から公開までを五つのステップにわけています。下の写真は、これまでに公開してきた資料の一部です。詳細はウェブサイトにアクセスしてご覧ください。

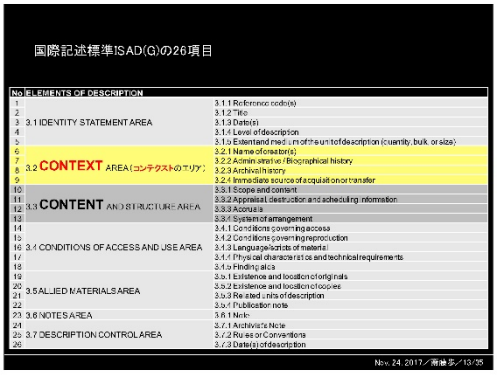
◯ 京都大学研究資源アーカイブ
http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/

2. アーカイブズ学における「コンテクスト」

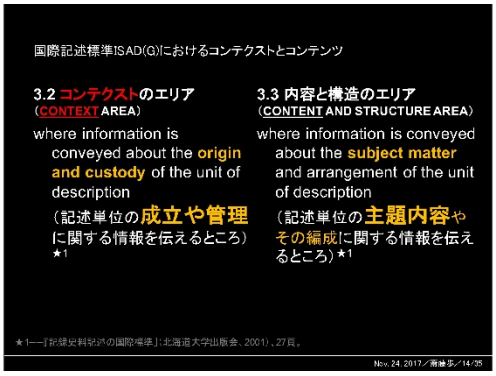
ここからは、アーカイブズ学の研究者またはアーキビストの立場での考察となります。はじめに、第一のキーワード「コンテクスト」について、アーカイブズ学に基づいて考えてみます。



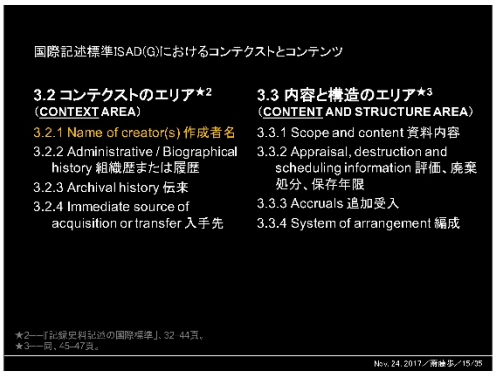
ここで考えるきっかけとして取り上げたいのが、ISAD(G)です。ISAD(G)は、General International Standard Archival Description の略称で、アーカイブズの情報を記述するための国際標準です。ICA（International Council on Archives＝国際アーカイブズ会議）が、1994 年に初版を、2000 年に第二版を発行しました――以降では第二版の内容を参照します。



ISAD(G)は 26 の記述項目を定義しており、そのうち 6 番目から 9 番目は「コンテクストのエリア」と呼ばれます。ここでは該当する四つの項目を黄色で示しました。これらをその下の「コンテンツと構造のエリア」と比較して理解を深めたいと思います。



ISAD(G)における、コンテクスト（左）とコンテンツ（右）の二つのエリアの比較です。コンテクストは、記録や文書の成り立ち、またはこれまでの利用や管理についての情報のことです。一方、コンテンツは、記録や文書そのものの内容についての情報のことです。

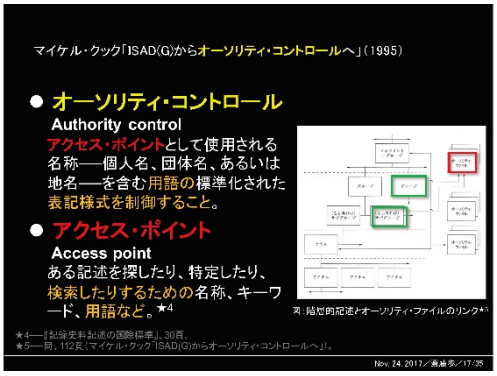


各エリアに含まれる記述項目です。それぞれ四つあります。ここからアーカイブズにおけるコンテクストの意味がより詳しくわかります。すなわち、「誰が作成したか（作成者名）」「その人物や組織の来歴（組織歴または履歴）」「過去にどのように管理されて使われてきたか（伝来）」「どこから収集、または移管を受けたのか（入手先）」についての情報がコンテクストです。

続く「ネットワーキング」の考察では、このうち一番目の「作成者名」に注目します。

3.「ネットワーキング」とはなにか――アーカイブズ学における「アクセス・ポイント」に注目して

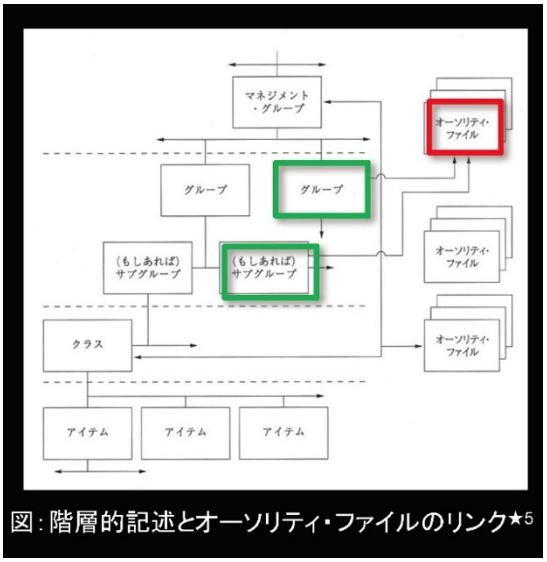
第二のキーワード「ネットワーキング」について考えてみます。ここでは「アクセス・ポイント」という用語に注目します。



さきほど触れた ISAD(G)の初版の発行後、その開発に深く関与した英国の研究者兼アーキビストであるマイケル・クックは、「ISAD(G)からオーソリティ・コントロールへ」という論文を残しました。その主旨は、ISAD(G)を公開した次の段階は、アーカイブズに「オーソリティ・コントロール authority control」が求められるということでした。

オーソリティ・コントロールは、一般的に「典拠管理」と訳されますが、ISAD(G)では「アクセス・ポイントとして使用される用語の表記を制御すること」と定義されています。ようするに、記述する用語の表記統一です。表記が統一された用語は、「アクセス・ポイント」として使用されることになります。アクセス・ポイントも ISAD(G)で定義されていて、「検索するためキーワード」を意味することがわかります。

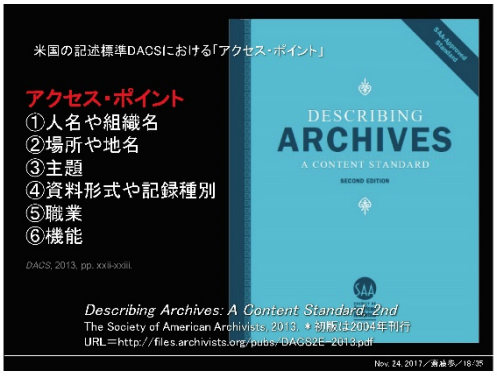
つまり、ISAD(G)による記述方法の国際的な標準化の次のミッションは、「用語の表記統一を実施して、検索等に使われるアクセス・ポイントを整備すること」です。クックはその考えを「オーソリティ・コントロールへ」という表現に込めたと理解できます。



図：階層的記述とオーソリティ・ファイルのリンク★5

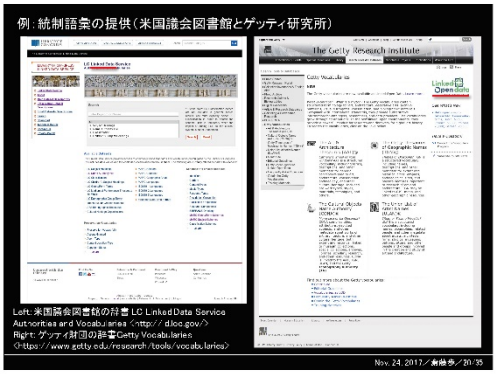
クックは、アクセス・ポイントの役割をこのような図で説明しています。赤で囲んだオーソリティ・ファイルはオーソリティ・レコードを含み、従来のアーカイブズ記述では離れ離れとなる二つのグループ(緑枠)――これは組織名を意味し、この下に作成された記録や文書を束ねています――を繋ぎます。

その後 ISAD(G)に続くかたちで、オーソリティ・コントロールのための記述標準として ISAAR(CPF)（International Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons and Families, 2004, 2011）が、ICA から発表されることにより、クックの考えが実現しました。

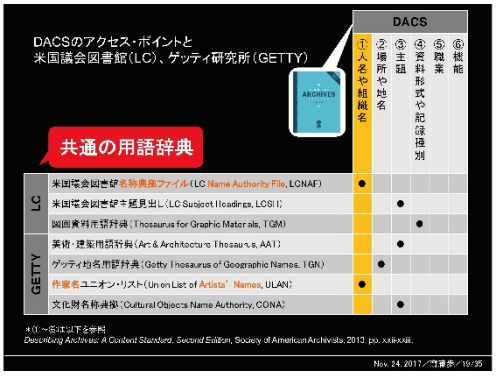


では、どのような用語がアクセス・ポイントとなるのでしょうか。それを知るために、次に、米国のアーカイブズ記述標準の DACS（Describing Archives: A Content Standard）を参照します。

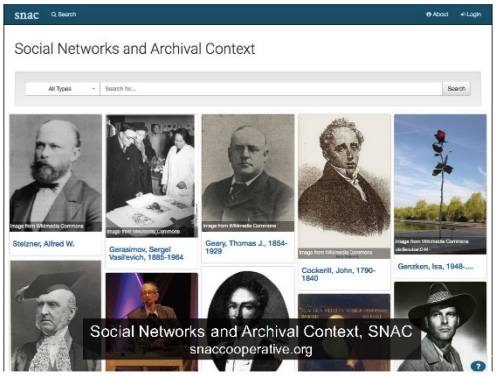
DACS では、アクセス・ポイントの種類として、①人名や組織名、②場所や地名、③主題、④資料形式や記録種別、⑤職業、⑥機能の六つを挙げています。これらのアクセス・ポイントの用語は、辞典（シソーラス）で表記や概念を定めます。



米国議会図書館やゲッティ研究所は、さまざまなアーカイブズ機関が参照可能なかたちで、このような用語辞典を提供しています。



これらの辞典と DACS のアクセス・ポイントの対応関係を整理すると、「①人名や組織名」との対応から、さきほどの ISAD(G)のコンテクストのエリアで第一に挙げられていた「作成者」にも関係して、二つの辞典が存在することがわかります。

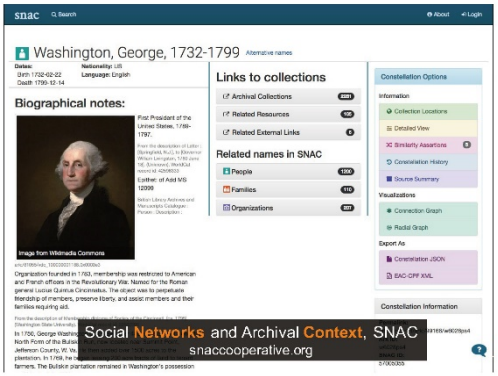


こうした用語辞典を使った事例をひとつ紹介します。米国の SNAC プロジェクト（Social Networks and Archival Context）です。オーソリティ・レコードとして表記統一された人名または組織名等をアクセス・ポイントにして、異なるアーカイブズ機関を横断して資料を検索するツールです。

ここでは、資料所蔵元の人名等のデータを図書館等で参照される国際典拠ファイルと照合することにより語彙を統制しています。したがって、このプロジェクトにより、アーカイブズには関係するが書誌情報には登場しにくい人名等の情報――例えば、著

書は残さなかったけれども資料が残された個人や団体の名称――が、既存の国際典拠ファイルに追加されていくことになります。

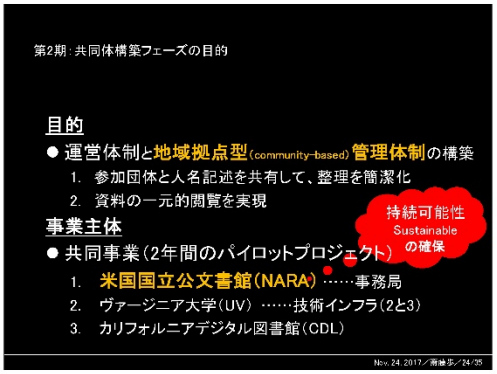
◯ SNAC プロジェクト（Social Networks and Archival Context）
http://snaccooperative.org/



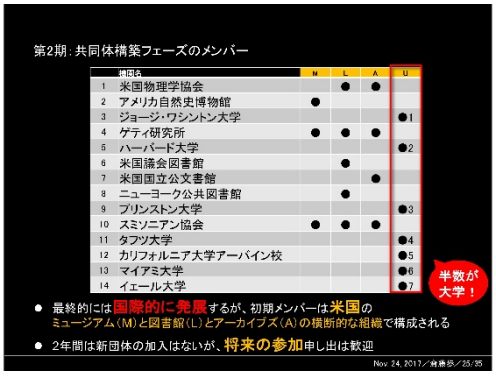
トップページの人名をクリックすると、関連する資料群（Links to collections）やSNAC内の関連する人名等(Related names in SNAC）が表示されて、固有名詞を入り口にして情報を辿ることができます。人名等の引用元（Constellation Options）や別名（Alternative names）も参照できます。

この SNAC プロジェクトのねらいを本日のテーマにそって説明すれば、人名等の「コンテクスト」情報を活用して、アーカイブズとその関連人物名等との「ネットワーク化」を図ること、と表現できます。

2010 年にスタートした SNAC プロジェクトは、現時点で第 3 フェーズを迎えています。このうち第 1 フェーズは「研究開発 Research & Development」、第 2 フェーズは「共同体構築 Cooperative program」が目的でした。



とくに第 2 フェーズは、持続性の確保がテーマでした。プロジェクトを主導する三つの組織のうち、米国国立公文書館（National Archives and Records Administration, NARA）が事務局として運営基盤を支え、二つの大学がシステム基盤を提供しました。とりわけ米国国立公文書館の参加が持続可能性の向上に一役買ったと考えられます。

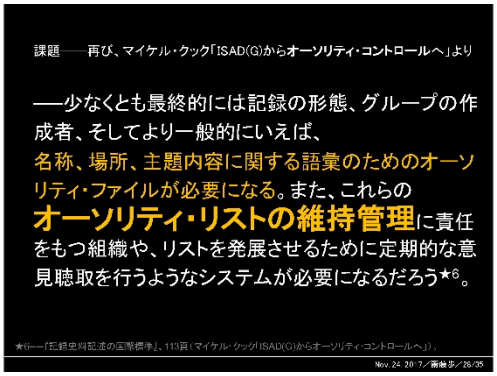


第 2 フェーズで情報を提供している参加機関は 14 団体――米国物理学協会、アメリカ自然史博物館、ジョージ・ワシントン大学、ゲティ研究所、ハーバード大学、米国議会図書館、米国国立公文書館、ニューヨーク公共図書館、プリンストン大学、スミソニアン協会、タフツ大学、カリフォルニア大学アーバイン校、マイアミ大学、イェール大学――でした。このうち半数の 7 機関が大学であることが特徴のひとつです。

2016 年にソウルで開催された ICA 世界大会では SNAC プロジェクトのセッションが企画されました。そこで、次のフェーズでは国際的なネットワーク形成へ進むことが示されました。ぜひ日本からも参加して、国内のアーカイブズに紐づく人名や組織名のプレゼンス向上に努めたいところです。

4．課題とまとめ

このような国際的な動向に対して、最後に課題を挙げます。



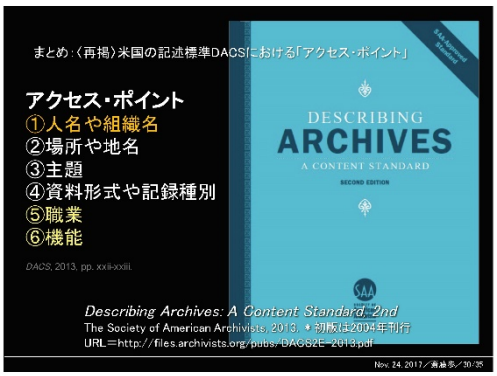
再びクックの論文を引用します。

ここでは「名称、場所、主題内容に関する語彙のためのオーソリティ・ファイルが必要になる」ことを予見しています。この点は、すでに紹介したように、米国議会図書館やゲッティ研究所による事典の共有や、国際典拠ファイルへの統合により実現しつつあります。

続く「オーソリティ・リストの維持管理」についても、SNAC プロジェクトで見られたように、米国国立公文書館が参加することにより持続可能性は高まりつつあります。しかし、どのアーカイブズ機関もオーソリティ・ファイルを維持管理できる体制が整っているわけではありません。

例として研究資源アーカイブの人名索引を眺めてみると、語彙が十分に統制されていないことがわかります。ここに維持管理の難しさが露呈しています。

この部分はシステムの刷新によって改善を図る予定ですし、現在でも語彙の統制は可能ではあります。しかし、ただシステムを用意するだけではこの課題の抜本的な解決には至りません。本質的な解決に必要なのは、語彙の手入れに割く時間の確保です。そのためには、このような語彙の維持管理を、新規コレクションの公開と同等に評価するような意識改革が不可欠です。したがって、情報を育てていくような長期計画にも意識を向けること、およびそのことへの組織的な理解の育成こそが今後の課題となります。



本日は、ネットワークの結節点となるコンテクスト情報として、人名や組織名を取り上げました。しかし、これだけがネットワークを形成する要素ではありません。例えばDACSが挙げる六つのアクセス・ポイントは、いずれもネットワークのハブとなりえます。このうち、「①人名や組織名」に加えて「⑤職業」と「⑥機能」は、ISAD(G)のコンテクストのエリアに関係しますが、それ以外はコンテンツそのものにも関係する要素です。

ここではシンポジウムのテーマにあわせて、コンテクストによるネットワークに注目しましたが、コンテンツについても同じようにオーソリティ・コントロールによるネットワーク形成の可能性があることは、続く議論の前提として理解しておく必要があります。

5．講演のレビュー

渡部葉子先生の「ミュージアムとコンテクスト」では、二つの方向からコンテクストとネットワークが語られました。ひとつは「Context in Museum」で、作品にコンテクストを設定する場としてミュージアムを捉える内容でした。もうひとつは「Museum in Context」で、ミュージアムを社会的なコンテクストのなかに置くことでミュージアム自体の制度批判に発展させる内容でした。

前半の「Context in Museum」では、ゴッホの作品を例に、モノそのものに属するコンテクスト情報が四つ例示されました。すなわち「1. 展覧会という〈表現形式〉に関する情報」「2. ゴッホ・ミュージアムという〈所蔵元〉に関する情報」「3. ゴッホの最後の自画像という〈年代〉に関する情報」「4. 美術作品における自画像という〈モチーフ〉

に関する情報」です。これらは、異なる作品を結びつけるネットワーキングのハブとして機能すると考えられます。

後半の「Museum in Context」では、ダニエル・ビュレンの作品を、ミュージアム本来の想定とは異なる方法で展示すること、または展示室の外に置くことによって、展示やミュージアムという制度が内包する社会的コンテクストをあらわにしていました。こちらはネットワーキングというテーマからやや外れる印象でしたが、ビュレンが作品の展示からミュージアムという制度を批判したように、アーカイブズのデジタル化から玉石混淆のデジタルアーカイブの現状に対して、その役割や可能性を批判的に検討できるのではないかと感じました。

金子晋丈先生の「コンテクストネットワーキングを実現する Catalogue System」は、私が話したコンテクストやコンテンツと共通するところが多いと感じました。

はじめに、コンテンツに対する多角的な理解と新たな発見へのきっかけとしてネットワーキングの利点が語られました。続いて、その基本設計と方法論が示されました。そのなかで私が関心を持ったのは、「ユニファイドなシステム」という表現です。私が話した辞典をつくることや用語の表記統一と関係するような印象を受けましたが、十分に理解が及びませんでしたので、のちほど詳しくうかがいたいところです。

最後のほうで話された、ローカルなネットワークを統合することにより大規模なグローバル・ネットワークが実現するという考えにも共感しました。私が紹介した SNAC プロジェクトにも同様のコンセプトが込められていると理解しているからです。

それから、ウェブにおけるネットワークが Google や Facebook に依存する――つまりネットワークの性質が民間のサービスの仕様に依存する――ことへの批判を込めて Catalogue System を解説されました。このあたりのお話をうかがって技術的な可能性を感じた一方で、私の率直な感想としては、労力面の課題を再認識しました。さきほど私が指摘したように、コンテクストによるネットワーキングの作業にどれだけのリソース――時間とお金――を割けるかは素朴でありながら大きな課題です。新しいコレクションを公開することは、数的要素に換算できるので、事業の成果としてわかりやすい。一方でコンテクストによるネットワーキングは、コレクションをより豊かにして質的要素を向上させることなので効果の測定が難しく、組織内の理解を得にくい場合があります。その点で、コンテクストによるネットワーキングについてわかりやすくメリットを説明し、理解を獲得する必要性をあらためて実感した次第です。

齋藤 歩（さいとう あゆむ）
大学卒業後、都内の編集事務所で書籍やウェブサイト等の企画と編集に従事。その後 2016 年より現職。2011 年からは学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の博士課程に在籍。現在アーカイブズ学に基づく建築レコードの管理技法をテーマにした博士論文を執筆中。